

日韓百寿者に関する研究動向と課題

Trends and Issues in Centenarian Studies of Japan and Korea

金恵媛¹, 金英順², 韓水正², 吉田節子³, 李成國⁴

Kim Hyeweon, Kim Youngsoon, Han Sujeong, Yoshida Setsuko, Lee Sungkook

Abstracts

This study discussed centenarian studies of Japan and Korea.

The percentage of centenarians in Korea is still low; and there are not many studies. Therefore, the study of Japanese centenarians, which lasted more than 30 years, would have a significant impact on research in Korea. According to the research results, the status of centenarians in Japan and Korea are similar.

There are several problems with centenarian study, but it will be a useful opportunity to find a good model of successful aging and care.

Key-word: centenarian study social factors longevity successful aging and care

1. 問題の所在

百寿者⁵研究はハードルの高い研究領域のひとつとされる。圧倒的に母数の少ない人口集団であるうえに⁶、研究対象者本人とのコミュニケーションが困難な場合が多いからである。これについて権藤(2007:507)は、百寿者研究からの新たな知見が少なく、発見されたとしても知見の再現性に乏しいうえに、方法論が発展途上であり百寿者の評価法が確立されていないことを指摘する。筆者はこれに、研究協力者が超高齢であるがゆえに研究成果の還元が困難であることも加えておきたい。

このような厳しい状況にもかかわらず百寿者に関する研究ニーズは年々高まりつつある。それは、高齢社

会の進展とともに、百寿者を含む超高齢者数が急増しているからである。平均寿命が90歳以上に達する「100歳時代」は確実に到来する将来像であり⁷、誰もが超高齢者となりうる。人口動向のほかにも、健康長寿の観点からも百寿者研究のニーズが高まっている。寿命の上限レベル⁸にまで達した百寿者の健康要因を解き明かすことは、超高齢社会に対する前向きな展望を可能にする健康長寿の有効な手がかりを得ることにつながる。これまでの百寿者研究の多くが長寿秘訣の解明に集中している所以でもある。

上述の百寿者研究のニーズが高まる社会人口的状況はアジア地域、とくに日韓両国において顕著に観察されている。両国は、高齢期のQOLに大きな影響を与える社会文化的、経済的な諸状況に類似点を多く持

¹ 山口県立大学大学院国際文化学研究所。

² 建陽大学校创意融合大学、同医科大学看護学科。

³ 九州栄養福祉大学。

⁴ 慶北大学校医科大学予防医学科。

⁵ センテナリアン (Centenarian)、100歳以上の超高齢者を指す言葉として、日本では「百寿者」、韓国では「百歳人」が多用されている。本稿では、単なる長命の概念ではなく「寿(ことほぐ)」(鈴木2003c:23)の意味合いを持つ用語として「百寿者」を採用する。「百寿者」は、沖縄の百寿者研究に携わってきた鈴木信氏が上述の意味と、「白寿」(99歳)からヒントを得て使用し始めた用語で、「百歳長寿者」を縮めたものである(稲垣2003:1)。

⁶ 個人情報保護によって百寿者へのアクセスが困難な点も母数の確保を困難にする(田中2010:168)。

⁷ 金(2012:54)。

⁸ 2012年12月6日、「世界最高齢者」とギネスに認定されていた米国在住の116歳の女性(米)が亡くなり、現在は京都市在住の木村次郎右衛門氏(1897年4月19日生)が最高齢者になるとみられる(<http://www.asahi.com/international/update/1205/TKY201212050734.html>)。人の限界寿命は不明であるが、近年の最高齢記録が115~116歳であることからして、百歳は寿命の上限に近い年齢と考えられる。

つ⁹。類似した高齢化過程を経験しているうえに、今後についても同様の展望がなされており、日韓比較考察は両国に多くの示唆を与えると考える。国際比較を射程に入れたより広い視角からの考察は、従来の国内研究の踏襲では見えにくい、新たな仮説生成につながるだろう。さらに、急激な高齢化の進行に備えるという両国の内発的な研究ニーズもさることながら、アジアの先発高齢国日韓に期待されている国際貢献としても有意義である。

以上の問題関心から、本稿では、日韓における百寿者の現状及び研究動向に関する考察を行う。考察に用いる文献資料の情報は、日韓の代表的な学術情報検索サイト¹⁰で「百寿」「百歳」をキーワードに検索して得た。入手できた資料（参考文献資料を参照のこと）を手がかりに、日韓百寿者の人口面での特徴、長寿要因、そして百寿者のQOL関連要因についての研究動向を検討する。

2. 百寿者人口の動向

(1) 百寿者人口の推移

2000年以前の韓国の100歳以上人口は（チェ 2002：32-33）、1960年に72名、1965年33名、1980年224名、1990年に405名となっている。しかし、1922年の戸籍編制の際の誤記、高い新生児死亡率のため出生届出を遅れて提出する過程で発生する間違いなどによって、約3分の1は実年齢より高く公式記録されていること

が実査の経験知から指摘されている。

一方、日本の場合、百寿者の年齢に対する信憑性が高いとされる。1898年に戸籍法が制定され、戸籍制度に対する習熟度が普遍的に高いことと、翌1899年には内閣に統計局が設置されて、以来実施されている人口動態統計による人口計測に対する信頼度が高い。百寿者数と百寿者率をみると、1920年に113名（うち女性は86名）、0.2名、続く1930年には105名（同74名）、同0.2名、1940年には184名（同39名）、同0.3名となっている（菱沼：25；28）。しかし戦争の混乱のなか記録のほとんどを消失し、現在把握できる公式統計は1947年（55名（同39名）、同0.1名）以降となる。そこで、本稿では、信頼できる百寿者統計で両国が揃う2000年、2005年、2010年現在の人口についてみていく¹¹。

日韓では高齢人口の実数、対総人口比ともに顕著な差異がみられるが、百寿者人口も同じである（表1）¹²。図1と併せてみると、全体の高齢化水準、百寿者人口ともに韓国は日本の80年代の水準である。性別構成では、両国ともに1：4の割合で女性が圧倒的な優位を保持している。ところで「東京百寿者調査」では、人口規模で圧倒的な優位を占める女性が、身体機能の面では男性より厳しい状況にいることが確認されている（権藤2004b）。身体機能において女性が劣位にあることは韓国でも確認されており（統計庁2011:10-13）、女性が多数を占める百寿者の増加は、虚弱百寿者の増加を意味しかねない。

表1 日韓の高齢率、百寿者数の推移

	日本			韓国		
	2000年	2005年	2010年	2000年	2005年	2010年
高齢率(%)	17.3	20.1	23.1	7.2	9.1	11.0
百寿者数(人)	13036	25554	44449	934	961	1836
(うち、女性の数)	(10878)	(21775)	(38580)	(852)	(857)	(1580)
百寿者率*(人)	10.27	20.01	34.86	2.02	2.03	3.8

* 百寿者率は、人口10万人当たりの百歳以上人口比。

資料：統計庁（2006；2011）、厚生労働省（2005；2010）より引用、作成。

⁹ WHOはアクティブ・エイジングの横断的な影響要因として、当該社会のジェンダーと文化の重要性に注目しているが（WHO）、日韓両国に類似点が多いことは言うまでもないであろう。

¹⁰ 文献資料の検索にはCiNii（<http://ci.nii.ac.jp/>）と、DBpia（<http://www.dbpia.co.kr/>）を利用した。

¹¹ 日本の場合、毎年敬老の日の記念行事に合わせて、住民基本台帳により「本人確認（面会等）による所在・存命確認ができた者」について自治体から厚生労働省に報告されるので各年度のデータが確認できる（厚生労働省：2012）。なお、対象には海外在留日本人、永住している在日外国人も含まれる。一方、韓国は人口センサスの結果を受けてのみ確認作業を行っており5年に一度百寿者の状況が把握できる。

¹² 集計基準は、韓国の場合は人口住宅総調査（11月1日現在）結果得られた100歳以上高齢者に対し、翌年3月～4月に実年齢確認等を行った数値である（金、2012：53）。一方の日本は、9月1日現在を調査時点とし9月15日時点（2008年までは9月30日）における年齢を基礎として集計している。

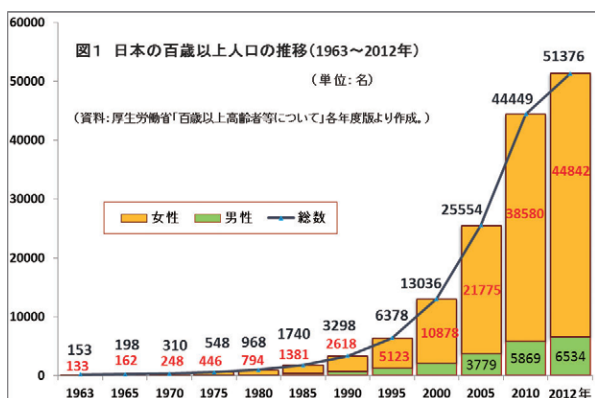


図1は、1963年からの日本の百歳以上人口の年次推移を示したものである。60年余りの間に人口規模が300倍以上に膨らんでいるが、特に80年代以降、大幅な増加を続けている。性別では、女性優位の状況が長期間にわたって維持されている。百寿者の年齢構造は死亡率の高い特性上、新百寿者の比重が高い。主な年の100歳人口数をみると、2005年度の12704人から2010年度には23269人と、5年の間に倍増している（厚生労働省2005；2010）。

100歳到達率（同年出生数に占める百歳以上人口の比率）に着目すると、1900年に生まれた142万人のうち2000年に無事に百歳に到達した人は2493人であり、約260人に1人の割合である（稲垣2003：1）。この世代が戦争や高い乳幼児死亡率など死亡リスクの高い時代を生き抜いたことを考慮すると、今後百歳到達率はさらに上昇することが予想される。この上昇については、医療や社会経済発展によって、身体機能が低下した状況でも長命を維持でき、また十分なケアを求めた施設入所者が増加している現状なども併せて考えなければならない（鈴木ほか1995;海老原ほか2006;権藤2007;小倉ほか2004）。韓国の場合も、2000年から2010年の間の時系列変化をみると、百寿者の増加と比例して要介護状態率が増加していることが確認された

（パクほか2002、統計庁2005;2010、鈴木2003 c :23）が提唱する「活動性余命」やアクティブ・エイジングの視角から百寿者の増加を検討する必要があるであろう。

(2) 百寿者の地域別分布

百寿者の地域別分布をみると（表2）、日韓はともに都市部において人口規模が大きい、百寿者率は農漁村地域において圧倒的に高い。両国ともに地域による差異が大きく、百寿者率の全国平均とは2～4倍程度まで開きがある。日本の場合、九州、四国、中国地方で高率を示す西高東低の傾向が維持されており、暖かく温暖な自然環境が高齢者の健康に保護的に働いていることが確認できる¹³。さらに、百寿者率の地理的高低分布に関する要因を検討した岡本ら（1998）は、病院及び施設医療の供給量や社会福祉サービスの充実度、そして余暇時間と長寿率との間に正の相関が、仕事時間とは負の相関が認められたことから、長寿地域のような集団レベルでの包括的な検討が必要であると指摘する。

韓国における地域環境要因に関する研究報告（キム2007）でも、長寿指標と社会環境要因との関連性に注目している。それによると、長寿指標は、地域の気候・水質汚染とはもちろんのこと、財政自立度や上水道の普及率とも負の相関がみられ、地域開発度が長寿に否定的な影響を及ぼす可能性を指摘する。韓国の長寿地域の変化からも社会環境要因の関わりが指摘されている。地域のもつ自然環境と経済的環境を基準に長寿度（高齢人口に占める80歳以上人口比）の時系列変化（1990年～2000年）に着目した研究によると、長寿度は、全国的に平準化する傾向を示す一方、田園環境を保持している地域、高齢者の経済活動が維持されやすい地域において長寿度が微増している（イ2002）。一方、65歳以上の生存率が首都圏で最も高いことに注目し、救急医療体系を含む医療資源基盤の整備状況が長寿指

表2 百寿者の地域別分布：百寿者率（上位5自治体）及び百寿者数（単位：人）

	日本(実数)		韓国(実数)	
	2005年	2010年	2005年	2010年
1	沖縄県 51.43(699)	島根県 74.37(534)	全羅南道 6.4(116)	済州島 15.0(80)
2	高知県 48.57(390)	沖縄県 66.71(922)	済州島 6.0(32)	全羅南道 9.4(163)
3	島根県 44.46(333)	高知県 63.05(483)	忠清南道 5.7(107)	全羅北道 8.0(143)
4	熊本県 35.21(652)	鹿児島県 59.89(1023)	全羅北道 3.4(61)	忠清南道 5.6(114)
5	鹿児島県 34.14(604)	山口県 56.43(821)	慶尚北道 3.2(84)	江原道 5.6(82)

資料：表1に同じ。

¹³ 岡本ほか（1998：533）。

標に影響を及ぼすと強調しているが（キム2010）、このことは「ソウル百歳人」調査でも確認されている。またソウルの百寿者では、乳製品を含む多様な食品の摂取習慣を持ち、社会活動に積極的に参加している状況が認められ、都市地域在住の超高齢者の長寿要因として注目されている¹⁴。

地域の社会環境を含む包括的な検討が重要だとする知見は沖縄の百寿者研究からもみられる。鈴木(2003a; 2003b)は、沖縄で観察される長寿現象の背景として、沖縄固有の食文化、活発な身体活動、精神・社会心理的健康をもたらす民俗文化、そして互助精神を活用した社会システムの4因子を挙げている。遺伝的要因や医療水準の向上より、栄養教育や健康教育、上下水道の完備などの社会環境が整ってきたことが全世界的な百寿者の増加をもたらしているという指摘（広瀬2006:118-119）とも重なる知見である。これらの研究は、地域が持つあらゆる側面が総合的、多角的に長寿を支えている現状をよく捉えていて、地域要因に関する多くの示唆が得られる。

3. 百寿者研究の成果と課題

百寿者研究は、「加齢プロセスの解明」と「長寿要因の探索」について医学領域を中心に展開されてきたが、近年は、「百寿の社会的価値観も含めて、百寿者の生活の質を考究」（鈴木ほか1995:421）することに比重をおく研究報告も増えてきた。百寿者研究が発展途上の段階にある韓国でも鈴木（2003d:46-47）が指摘した「意義のある人生を送る超長寿者の生き様」への探求としてwell aging、well dyingに関する関心が

高まっている（ハン2002;2004、ソウル大老化・高齢社会研究所2009）。

そこで百寿者研究に対する社会的ニーズ、成果の還元という観点から日韓の百寿者に関する社会的関心をみておこう。日本では、超高齢社会の到来を、依存的生活の長期化と受け止める傾向が目立つ。「ぼっくり信仰」や「PPK・ピンピンコロリ」¹⁵に対する根強い支持は、上述のような不安の表れとしても見受けられる。一方百寿者の生涯現役活動、すなわち心身の健康だけでなく、社会参加活動を継続している百寿者に対する関心も高まっている。百寿者をとり上げたNHKの長寿番組『百歳バンザイ!』¹⁶に対する反響や、昇地三郎氏（106歳、1906年8月16日生）や日野原重明氏（101歳、1911年10月4日生）の旺盛な活動ぶりに高い関心が寄せられている。生涯現役を体現化しているリーダー的百寿者に向けられた熱いまなざしは、超高齢者社会を生きる当事者意識の発露にほかならない。

一方韓国の場合は、百寿者率が相対的に低く、百寿者の活動ぶりがクローズアップされることは多くない。現在の百寿者は壮年期に韓国戦争を経験し、ほとんどの人が教育を受けていない。そのうえ第1次産業従事者が多かったことも百寿者への社会的関心が高くない背景要因として考えられる¹⁷。しかし、「100歳時代」の到来を祝福としてばかり受け止められない状況は日本と類似している。将来不安の内容に注目すると、健康不安ともに経済面についての不安が高く観察されている¹⁸。個人レベルでの老後準備が困難であった上に、社会保障基盤の未整備と近年の経済格差の拡大によるしわ寄せが高齢層に集中していることが

¹⁴ 金（2012:55）。

¹⁵ 長野県は長寿地域に多い温暖な気候とは程遠い山岳寒冷地でありながら、平均寿命が長く老人医療費を低く維持できており、効率的な地域保健医療システムが注目されている。同県高森町発祥の「PPK（ピン・ピン・コロリ）」とは、「ピンピンして健康で長生きし、コロリと死ねたら幸せ」という町内の高齢者の気持ちの具現化した健康体力づくり活動である（北沢:1980）。東洋医学の要素を多く取り入れ、「手軽で・楽しく・どこでも」できる健康長寿体操を考案し、3年間普及指導した成果を日本体育学会で発表し、これを機に広く知られるようになった。2003年には県内長寿地域である佐久市に「ピンピンコロリ地蔵」が建立されている（<http://www.takamori.ne.jp/~pinkoro/>）。

¹⁶ 「全国各地で生き生きと暮らす百歳の人々の過去と今を描き、長寿の秘訣をさぐるとともに、人生のメッセージを通して今の時代に元気を与える」(http://www.nhk.or.jp/archives/archives-catalogue/pglist/pglist_2005-08.html)番組としてNHK広島局が制作総括し、総合テレビ・教育テレビ・BS2と海外向けNHKワールドで放送していた10分間のドキュメンタリー番組（2002年4月6日～2011年4月2日）。

¹⁷ 百寿者が相対的に教育水準が高い傾向があることは日本でも検証されているが（権藤2007）、韓国百寿者の教育水準は、「受けたことがない」の割合がきわめて高い（2005年90.4%、2010年78.8%）。日本において1905年には義務教育（初等教育）就学率が95%に達した状況とは対照的である（文部科学省「日本の成長と教育」(http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad196201/hpad196201_2_012.html))。

¹⁸ 韓国の65歳以上人口の経済状況を見ると（統計庁2011b:24-29）、2010年現在、公的年金受給率は30.0%に過ぎない。そのため老後の準備が出来ていない人が多く（61.0%）、このうち半数は子供に依存している。また主な就労希望理由は生活費を稼ぐことであり、仕事の選択基準も「賃金水準」となっている。韓国の高齢者の経済的困窮感やストレス因に関する対日比較は、内閣府の国際比較調査結果が分かりやすい（金:2011）。

表3 日韓の主な百寿者研究一覧

	開始年	名称	調査研究報告の主なキーワード	備考
日本	1976	沖縄百寿者調査	ADLの変遷 活動性余命 環境要因 Okinawa Program wellness(wellbeing wellaging, welldying)	
	1992	東京百寿者調査	包括的調査研究 環境要因 多面的検討 加齢プロセス 長寿要因 生活機能 抗老化 余命のモデル 虚弱 幸福感 三者モデル 百寿者効果 successful care successful aging	東京 23区
	2000	全国百寿者 1/2 サンプル調査	睡眠 QOL(健康感、楽しみ、社会活動、周囲との関係、孤独感)	
韓国	2001	韓国の百歳人	認知 心理的適応・性格・感情 遺伝 医学・生理学的研究 家族関係 QOL 食生活 長寿文化	
	2009	ソウルの百歳人	社会活動性 扶養補償 長寿文化 空間的弱者	94+
	2006 2011	100歳以上高齢者集計結果	基本属性(教育歴、宗教、職歴等) 家族状況 家族歴 健康状態 健康習慣 摂取食品 楽しみ 感情表現 生活満足度 長寿事由	

大きく影響している。

<表3>には、前述の学術情報サイトなどにおいて研究成果が多く報告されている日韓の主な百寿者調査研究を示した。各調査の目的や活用状況がわかる手がかりとして、関連報告におけるキーワードを提示した。日本の場合は、「沖縄百寿者調査」が30年以上継続し、「東京百寿者調査」が2010年から国際比較調査に拡大実施されるなど、縦断的考察の可能性が高い現在進行形の大規模研究プロジェクトが特徴的である。ところで、日本の厚生労働省の百寿者データは、毎年調査結果が発表されるものの、年齢構成や都道府県レベルの人口情報の開示に止まっている。それに対し韓国統計庁の資料は、人口センサスに連動した5年周期の発表であることから使いにくい点はあるものの、家族状況や身体機能など百寿者の社会人口の状況や健康状況がわかるおおよその内容を盛り込んでおり、韓国百寿者の全体像を把握する手がかりとなる。さらに、「韓国百歳人」調査では沖縄百寿者調査を、「ソウルの百歳人」調査では「東京百寿者調査」を参考にしている。キーワードにみるように調査内容に類似点が多く、日韓比較研究の基礎データとして活用できる。

長寿要因の究明に当たっては、遺伝学、医学、心理学、社会学、栄養学など、多岐にわたる領域の学際的・融合的研究が試みられてきた。健康長寿の要因としては、先天的な遺伝素因¹⁹以上に、学歴や生活習慣を

含む後天的な環境要因によるところが大きいと評価する(尾崎ほか:2003)。Roweらは(鈴木1998:190; 広瀬ほか1998:190)、高齢者にみられる諸現象を加齢と二次的要因によるものに区分し、二次的関与の少ない加齢をサクセスフル・エイジングと呼ぶことを提唱するが、後天的要因の影響が強く認められる百寿者に関する研究が持つ意味もそこに求めるべきであろう。鈴木は(鈴木1998:190)二次的要因の1つである疾患にみられる高齢者の医学的特徴について、慢性の、複数の疾患をもつものが多く、同じ疾患、病態でも状態の発現や予後に個人差があり、対人関係、経済状況などの環境要因が大きな影響を及ぼすと指摘する。WHOがアクティブ・エイジングを提唱するなかで、高齢者が保持する環境の個性と、それを包括的に保障する社会の役割など、ライフコースの多様性に基づくさまざまな連帯を強調していることとも相通じる。

相対的に罹患歴の少ないという特徴をもつ百寿者であるが、身体機能の面では、現状としては認知機能が全般的に低く慢性疾患の現有率が高いことが明らかになっている。百寿者に虚弱者が多いことは、百寿者を長寿エリートと位置づけることに疑問を投げかけ、結果的に百寿者研究の意義の見直しを促してもいよう(権藤2007; 統計庁2011)。また、百寿者数の増加が虚弱者の増加と解釈されることは、超高齢社会に対する否定的な展望を強めることになりかねない。その一方

¹⁹ 長寿家系の確認などから、「東京百寿者調査」では遺伝素因を25%程度と評価している。

で、百寿者の睡眠の質がおおむね良好であり（尾崎ほか2005:7）、高血圧や糖尿病など生活習慣病の発現率がきわめて低いことが多くの研究結果から確認されている。百寿者を「健康生活習慣の成功モデル」として位置づけ、百寿者研究の成果還元の方法もその延長線上で検討することが必要であろう。

いずれの調査においても百寿者の性格特性として開放性、外向性、社交性、誠実性が認められるものの、それが長寿要因なのか発達変化によるものか判断が困難なことも解決すべき研究課題として指摘されている。また、沖縄百寿者の特長として、交易役割を担ってきた沖縄独特の風潮や地域に残っている百寿者の伝統的な役割が百寿者に肯定的な社会心理状況を造成し、高齢者の社会参加の増大、社交的性格につながっているという知見からは、健康長寿の実現に向けての地域的取組みのあり方に示唆するところが大きい（鈴木2003 d）。

百寿者の日常生活に目を向け、現状をみると、在宅介護についての認識が地域文化の影響を受けていること（塚本ほか2001）、百寿者介護において介護に対する習熟や「百寿者効果」、「介護補償」が肯定的に影響していることが特徴的に確認された（新井ほか2002ソウル大老化・高齢社会研究所2009）。実際、85歳以上の高齢者を自宅で介護するケースとの比較で、百寿者家族のほうで介護疲労度が低い結果がみられた（新井ほか2002）。また、老老介護がほとんどである百寿者介護において、主介護者、百寿者（要介護者）、支援者の三者モデルを検討した結果、主介護者へのサポートが要介護者へのサポートへと好循環する結果も確認されている（柳生ほか1998：13；島内ほか2010）。これらの結果から、超高齢期における虚弱予防や虚弱を前提としたサクセスフル・エイジング、サクセスフル・ケアのモデルの構築に百寿者研究からの知見が重用され得るという、百寿者研究の意義がいま一つ確認できよう（新井ほか2002）。

おわりに

日韓において、超高齢期のQOLについての社会的関心の増大とともに百寿者人口の急増が確認できた。研究においては、両国で類似した問題関心、研究成果の蓄積がみられた。すでに述べたように日韓では人口面や百寿者の世代特性の面で差異が大きく、したがって百寿者研究の歴史にも開きがある。しかしながら重要な長寿要因とされる社会的環境要因、すなわち社会

文化や経済発展過程、さらには人口高齢化の傾向などにおいて類似点が多く、約40年にわたる日本の研究成果が韓国の百寿者研究に与える示唆は図りしれない。

これまで蓄積された百寿者研究の成果は、百寿者への社会的関心という面では、百寿者すなわち健康長寿のエリートという一面的な捉え方から、「健康長寿のための理想的生活習慣の実践者」とするより多面的な観点からの関心を促すものである。研究面では、百寿者予備軍の健康生活習慣を含む長寿要因及びQOLに対する経時的な追跡を行う縦断的研究、国際連携研究を積極的に推進すること、百寿者研究からサクセスフル・エイジングのモデル像を見出すこと、さらには百寿者研究の意義に対する再考を求めている。

超高齢期を「百寿の社会的価値観も含めて、百寿者の生活の質も考究していきたい」（鈴木ほか：421）とする言葉の通り、究極的には健康長寿に対する社会的価値観の問い直し、社会連携の方向性が問われているのではなかろうか。また、分野横断的な研究、社会的認識の共有が求められる領域特性から、研究に携わるものの視野はもちろんのこと、成果還元を受けとめる社会に長寿、世代共生への多面的な理解の促進においても百寿者研究が貢献できると考える。

参考資料

●日本語文献

新井康通ほか（2002）「百寿者の多面的検討（高齢化社会）」『生体の科学』53（5）：509-514

石川みち子ほか（2005）「I県における百寿者の日常生活動作および認知機能について—居住形態および趣味・社会活動との関連から—」『老年看護学』10（1）：69-74

稲垣宏樹（2003.3）「人生百年時代？—あなたは100歳まで生き残れますか—」（財）東京都高齢者研究・福祉振興財団 東京都老人総合研究所 広報委員会内「老人研情報」編集委員会『老人研情報』195：1-2 (http://www.tmg Hig.jp/J_TMIG/books/rj_pdf/rj_no195.pdf#search=2000%E5%B9%B4%E3%81%AE100%E6%AD%B3%E9%95%B7%E5%AF%BF)

海老原良典ほか（2006.4）「百寿者からのメッセージ」（財）博慈会老人病研究所『未病と抗老化』15（1）：35-40

岡本和士ほか（1998）「わが国における百寿者の地理分布とその関連要因」日本衛生学会『日衛誌』53：529-535

- 萩原隆二ほか(2000)「悉皆調査によるわが国の百寿者の生活実態」日本公衆衛生学会『日本公衆誌』3:275-283
- 小倉美沙子ほか(2004)「I県に在住する百寿者の日常生活動作と性格傾向について(第1報)」『岩手県立大学看護学部紀要』6:59-66
- 尾崎章子ほか(2003.8)「百寿者のQuality of Life維持とその関連要因」日本公衆衛生学会『日本公衆誌』8:697-712
- 尾崎章子ほか(2005)「百寿者の睡眠と心身の健康、生活習慣」『東邦大学医学部看護学科紀要』19:3-12
- 香川靖雄(2003.1)「エッセー:生活習慣のはなし(9)百寿者の生活習慣と遺伝子」『最新医学』58(1):122-124
- 金森雅夫ほか「百寿者の身体状況、性格特性と生活背景の分析」『保健の科学』47(3):231-236
- 北沢豊治(1980.10.11)「中高年齢者の体力づくりについて:高森町におけるPPK運動」日本体育学会大会号(31):235
- 金恵媛(2011)「日・韓比較」内閣府『高齢者の生活と意識:第7回国際比較調査結果報告書』283-316
- 金恵媛(2012)「韓国百寿者に関する社会的関心と課題」『山口県立大学学術情報』5:49-58
- 厚生労働省(2005;2010;2012)「百歳以上高齢者等について」
- 権藤恭之(2004a)「老化の科学(百寿者が教えてくれるもの最終回)」『働く人の安全と健康』5(12):45-47
- 権藤恭之(2004b)「百寿者研究からわかった長寿者の現状と要因(特集高齢社会と健康)」『日本の科学者』39(2):10-15
- 権藤恭之(2007.1)「百寿者研究の現状と展望」『老年社会科学』28(4):504-512
- 鈴木信ほか(1995)「沖縄百寿者のADLの変遷に関する研究」『日本老年医学学会雑誌』32:416-423
- 鈴木信(2003a)「沖縄長寿者の食事:長寿を支えた沖縄の食文化環境因子の中で最大の寄与(シンポジウム抗加齢医学の新展開)」『日経メディカル』32(1):127-130
- 鈴木信(2003b)「特集日本の百寿:なぜ沖縄に百寿者が多いのか」『文芸春秋』81(9):87-90
- 鈴木信(2003c)「沖縄の長寿は今」『沖縄国際大学人間福祉研究』1(1):23-37
- 鈴木信(2003d)「沖縄県の在宅百寿者の健康百寿要因に関する社会学的研究(第1報)—ADLと性格について—」『沖縄国際大学人間福祉研究』1(1):39-48
- 島内晶ほか(2010)「百寿者介護へのソーシャル・サポート—三者モデルによる考察—」『高齢者のケアと行動科学』15:34-47
- 白澤卓二ほか(2006)「随筆:基礎老化研究あれこれ(9)百寿者の持つ『心の強さ』の秘密を探る」『基礎老化研究』30(4):37-38
- 高山美智代ほか(2009.7)「健康寿命の維持・延長へのアプローチ:寿命の延長因子—病歴からみた百寿者—基礎・臨床研究の進歩」『日本臨床』67(7):1343-1347
- 高山美智代ほか(2010.10)「百寿者の生活機能(特集生活機能と介護予防の運動)」『体育の科学』60(10):706-710
- WHO編著(日本生活協同組合連合会医療部会翻訳)(2007)「アクティブ・エイジング—その政策的枠組み—」萌文社
- 財団法人長寿科学振興財団(2002)「健やかに老いるために—長寿科学総合研究の結果から—」厚生労働科学研究費長寿科学総合研究事業(平成11~13年度)成果報告書
- 健康・体力づくり財団(2002)「長寿大国ニッポンにおける百寿者の暮らし:全国100歳老人の1/2サンプルの横断的研究報告」(http://www.health-net.or.jp/tyousa/houkoku/pdf/h13_hyakujuusya.pdf)
- 田中マキ子ほか(2010)「百歳研究の動向と課題」『山口県立大学学術情報』2:167-174
- 塚本恵ほか(2001)「沖縄における在宅百歳老人の生活と介護に関する研究—生活自立例と寝たきり例の比較—」『沖縄県立看護大学紀要』2:9-17
- にっち倶楽部(2004.9)『にっち倶楽部』32:2-3
- 野崎宏幸ほか(1998)「百寿者の日常生活自立度と血清アルブミン濃度に関する研究」『日老医誌』35:741-747
- 野原由美子ほか(1997.3)「沖縄の在宅および施設百寿者の自立度と介助に関する研究」『老年社会科学』18(2):107-112
- 菱沼従尹(1953)「資料 百寿者について」『生命保険協会会報』35(4):20-37
- 広瀬信義ほか(1998.10)「講座 百寿者の多面的検討—身体および社会的アプローチ—」慶応義塾大学医学部老年科『慶応医学』75(3):189-199
- 広瀬信義ほか(2001.11)「不老長寿への道—百寿者調査より—」『基礎老化研究』25(3):142-147
- 広瀬信義ほか(2006.3)「百寿者の抗老化機序—健康長寿達成に向けて—(第33回内科学の展望 高齢化時代の内科学)」『日本内科学会雑誌』95(3):35-40

広瀬信義ほか (2006.4) 「対談 生活習慣病の現状と未来 (13)」『最新医学』61 (4) :118-131

安次富郁哉 (2010) 「新百歳長寿者像～沖縄における新百寿者の健康及び生活実態調査から～」『沖縄国際大学人間福祉研究』7 (2) : 15-36

柳生聖子ほか (1998.8) 「百寿者の横断的研究」『厚生指標』45 (8) :10-14

米井嘉一 (2004.3) 「老化は治療のできる病気です 抗加齢医学で『百寿者』も夢じゃない」(特集 年齢を味方につけよう) 『婦人公論』89 (5) : 41-43

●韓国語文献

キム・ジョンイン (1998) 「済州島百歳人の長寿要因救命のための現象学的研究」『地域社会看護学会誌』9 (1) : 40-63

キム・ジョンイン (1998) 「百歳以上老人の長寿要因に対する調査研究」『保健と福祉』創刊号:9-38

キム・ジョンイン (2002) 「百歳以上長寿老人の居住地域に対する社会環境要因」『韓国老年学』21 (3) :157-168

キム・ジョンイン (2007) 「百歳人の地域別長寿指標と社会環境要因の影響力—2005年人口調査資料を中心に—」『韓国老年学』27 (3) : 635-647

キム・ジョンイン (2010) 「老人の生存百歳長寿指標に及ぼす健康要因の影響力」『保健教育健康増進学会』27 (2) : 109-119.

キム・ジョンイン (2011) 「100歳以上長寿老人の食生活経験」『成人看護学会誌』23 (3) : 221-234

イ・ジョンジェ (2002) 「地理情報システムを利用した長寿地域の空間的分析」パク・サンチョル編『韓国の百歳人』ソウル大学出版部 : 11-25

チョウ・ミョンオク (1997) 「老人が認識した死の意味と準備に関する文化技術的探索事例研究」『韓国老年学』17 (3) : 1-35

ハン・ヘギョン (2002a) 「韓国百歳人の家族関係とQOL」パク・サンチョル編『韓国の百歳人』ソウル大学出版部 : 67-107

ハン・ヘギョンほか (2002b) 「韓国100歳老人と家族」『家族と文化』14 (2) : 59-84

ハン・ヘギョンほか (2004) 「韓国百歳老人の『長生き』の意味に関する質的研究」『韓国地域社会生活科学会誌』15 (3) : 121-135

パク・サンチョル (2009) 『100歳人物語』セムト社

ソウル大老化・高齢社会研究所 (2009) 「ソウル百歳人研究」

チュ・ソンジェ (2002) 「韓国百歳人の社会的及び心理的特性」パク・サンチョル編『韓国の百歳人』ソウル大学出版部 : 27-65

統計庁 (2006.6) 「100歳以上高齢者調査結果」

統計庁 (2011) 「2011 高齢者統計」

統計庁 (2011.6) 「100歳以上高齢者調査結果」